

「震災伝承検討会議」の 結果概要

平成28年11月28日

震災伝承検討会議(第3回)資料

第1回 震災伝承検討会議の議題

- (1)「震災伝承検討会議」の役割・スケジュール
- (2)「石巻市震災伝承計画」の枠組み(案)
- (3)震災伝承の現況と課題
- (4)震災伝承等に関する意見・意向

第2回 震災伝承検討会議の議題

- (1)第1回検討会議を振り返る
- (2)現地視察報告を確認・共有する
- (3)石巻市における震災伝承への取り組みを共有する
- (4)今後の進め方とスケジュールを確認・共有する
- (5)今後の震災伝承等に関して協議

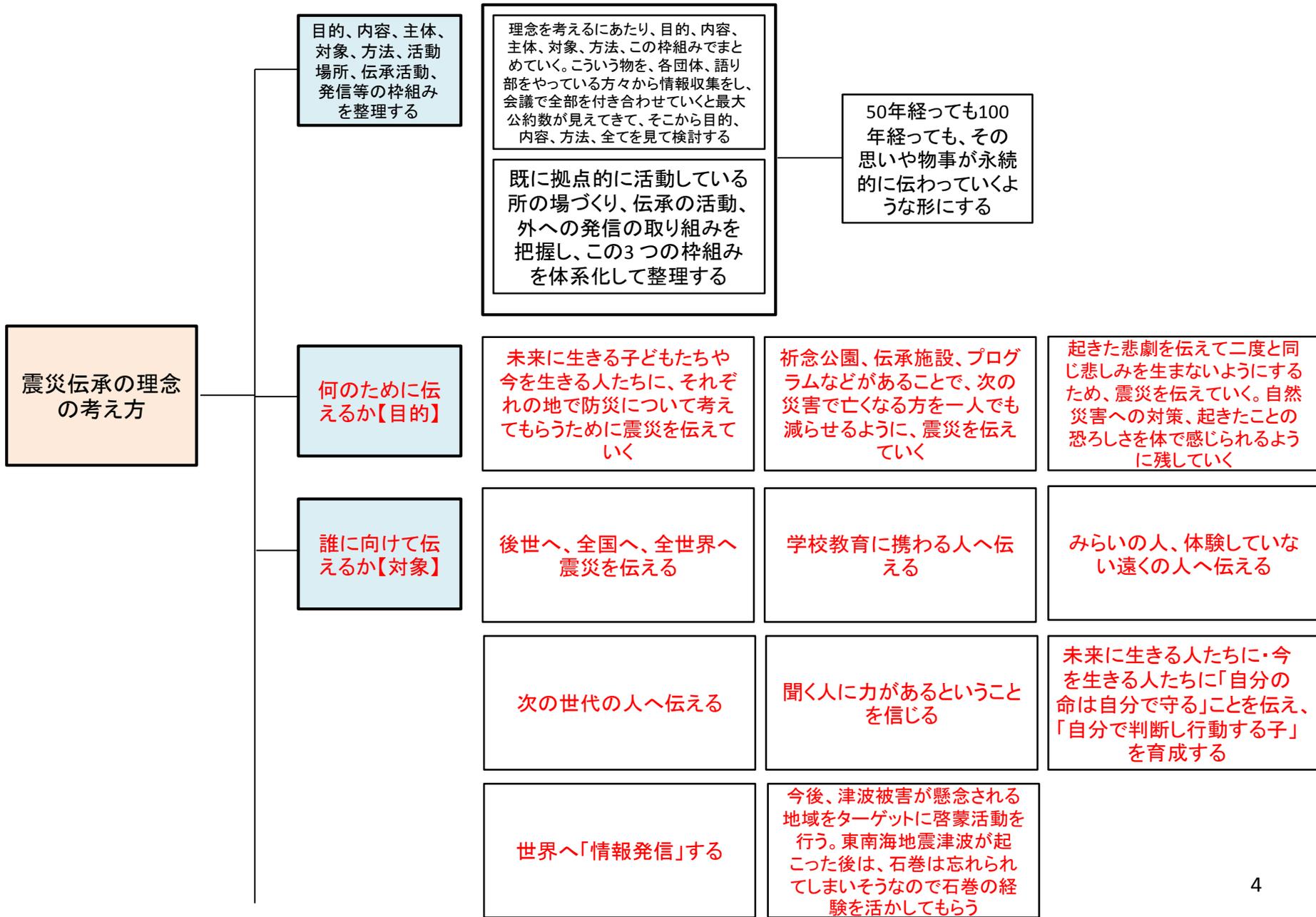
意見の振り返り

- 第1回会議では、意見が「震災伝承の理念の考え方」、「伝承する内容」、「伝承の方法」に概ね集約され、その他に「情報館のあり方、直すべき点」などについて意見が出された。
- 第2回会議では、「震災伝承の理念の考え方」にテーマを絞り議論
- 第1回会議後には現地視察も実施。視察参加者による視察報告にて意見聴取を実施した。

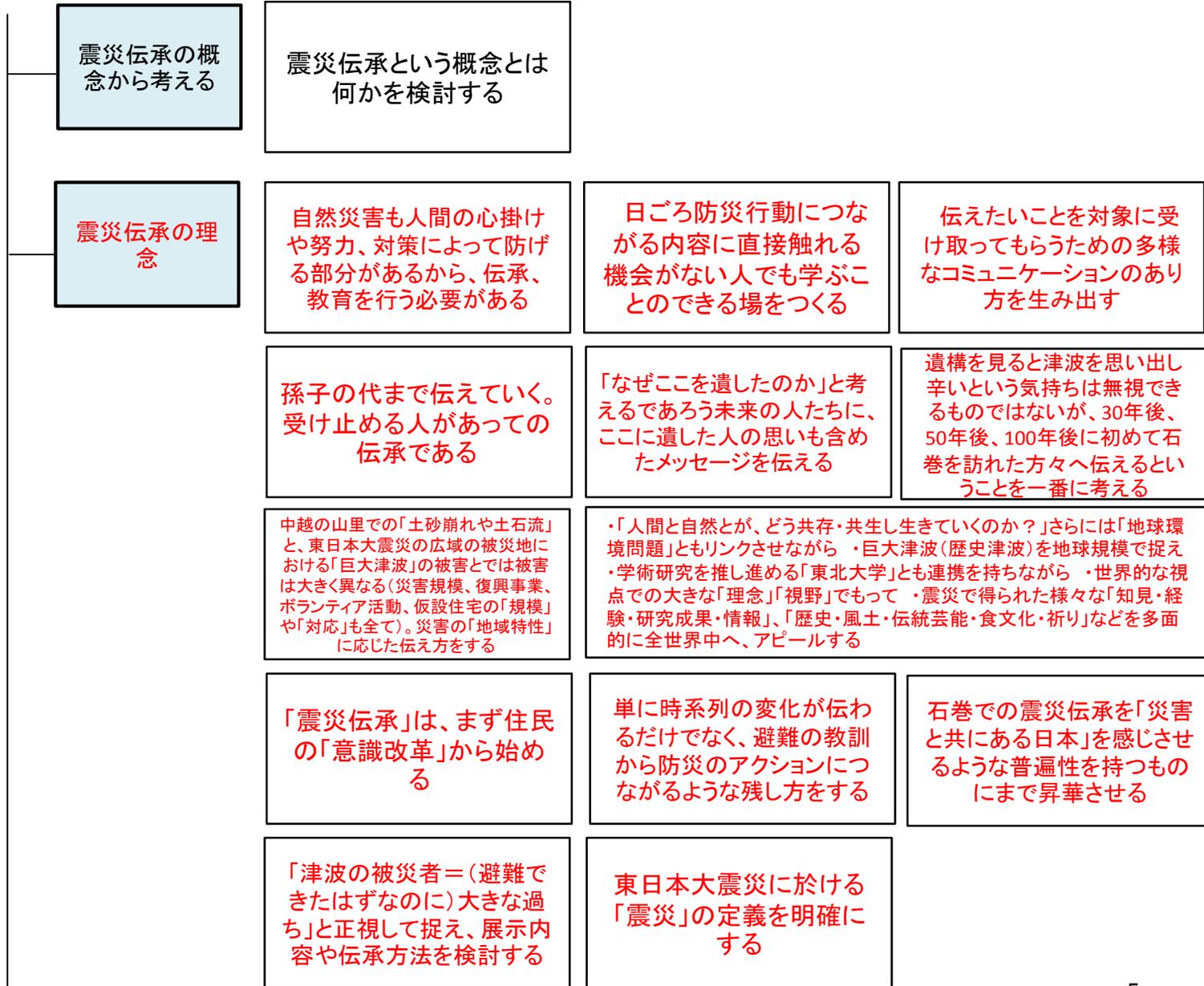
意見の分類

1. 震災伝承の理念の考え方
2. 伝承する内容
3. 伝承の方法
4. 施設のあり方

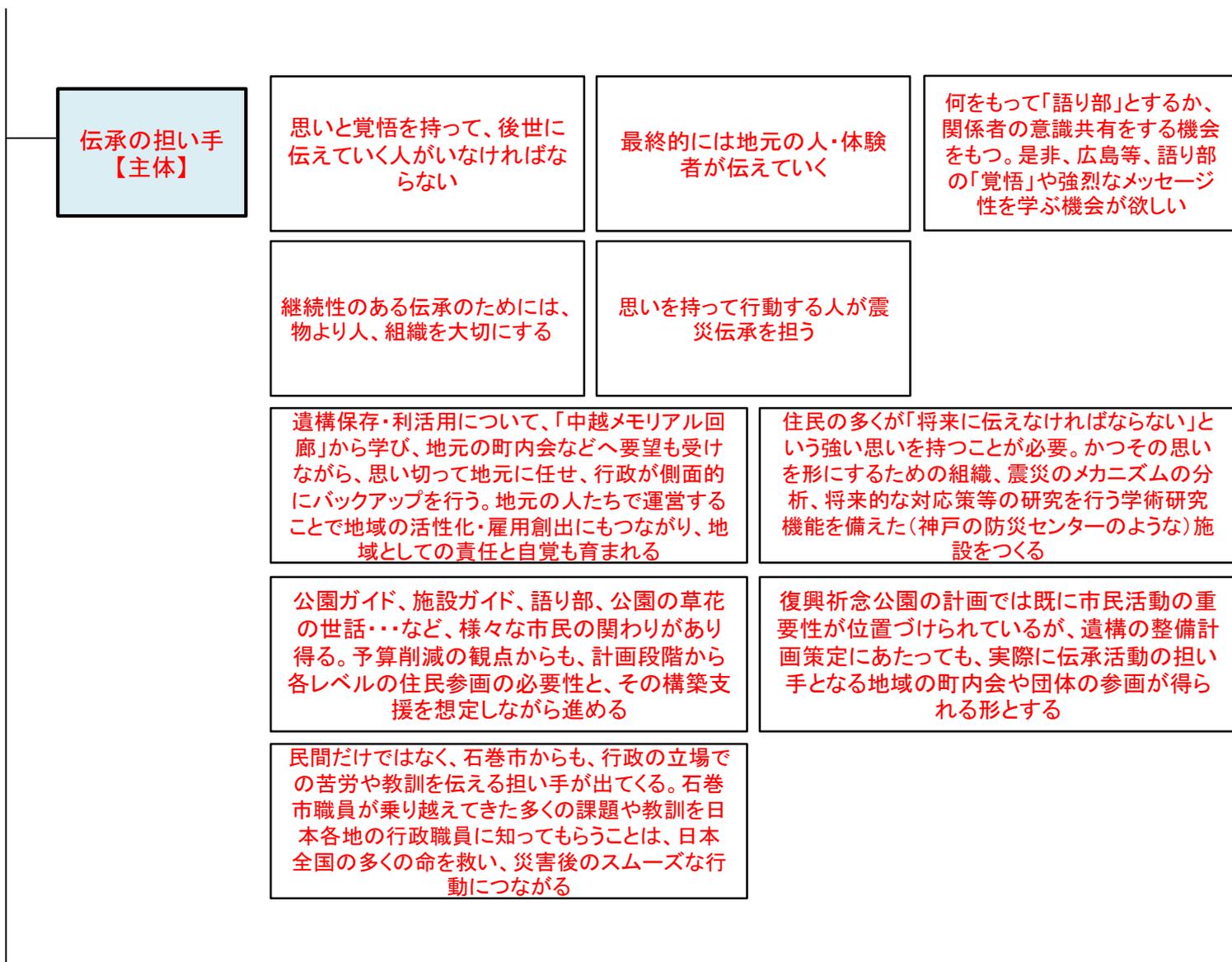
1. 震災伝承の理念の考え方



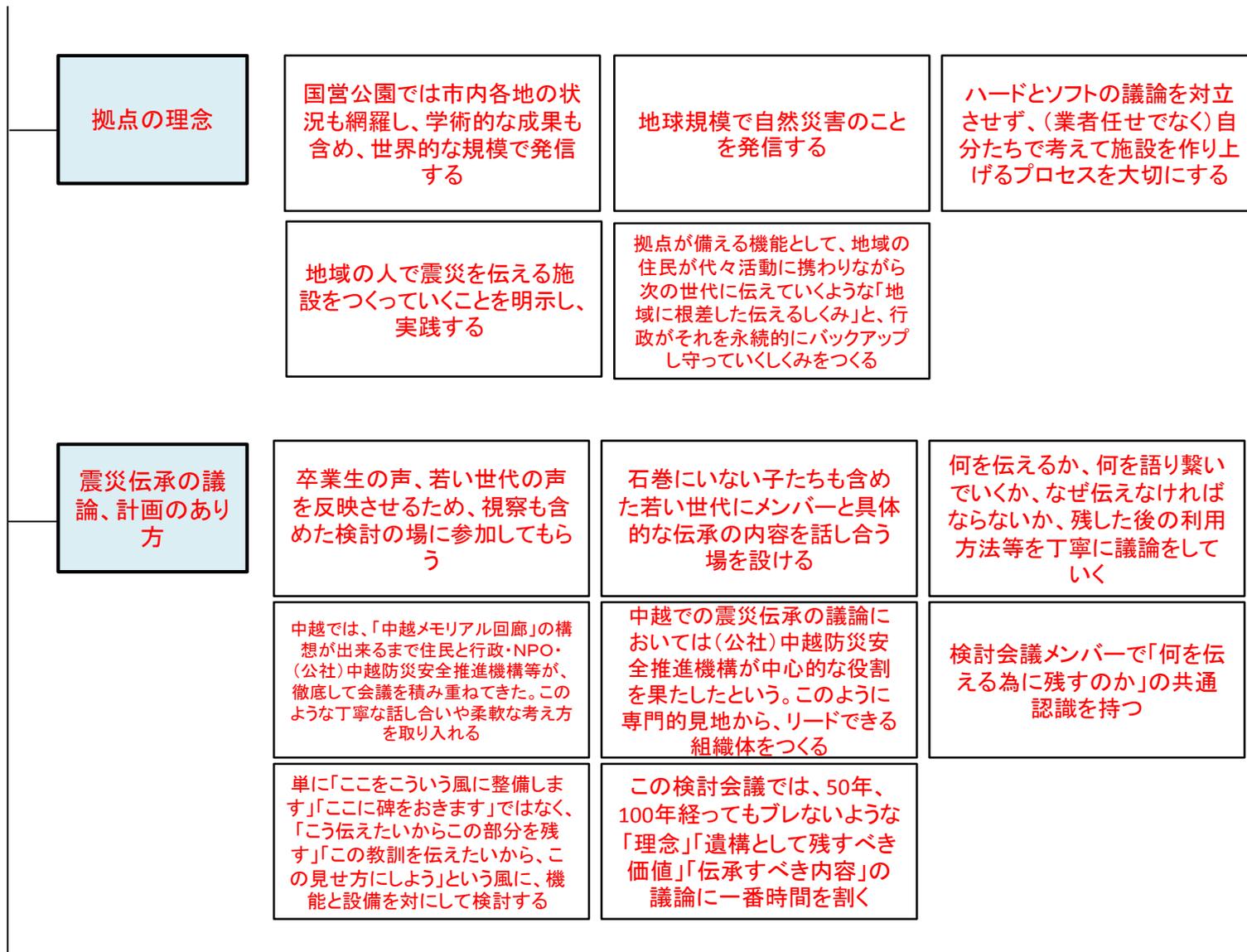
1. 震災伝承の理念の考え方



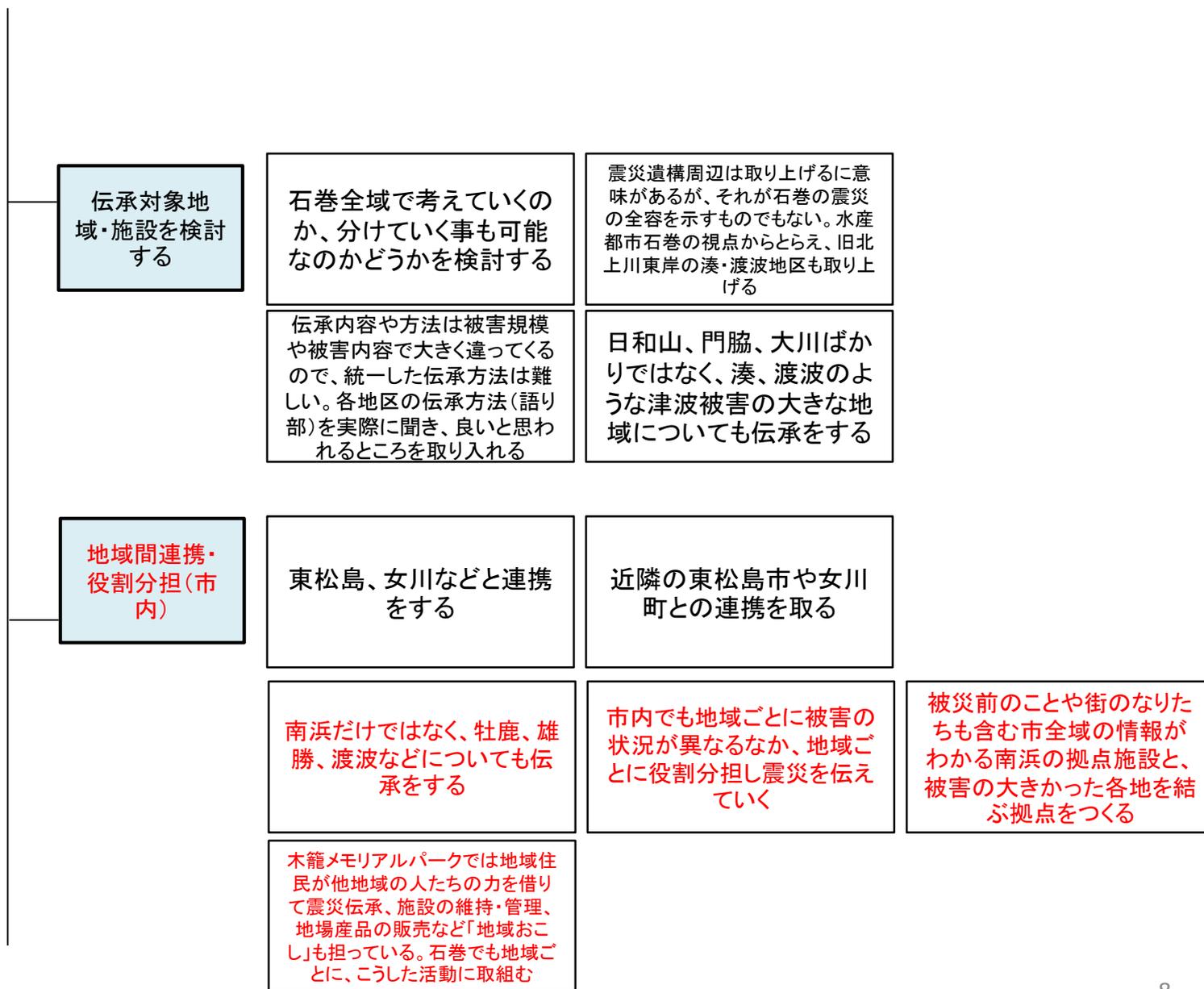
1. 震災伝承の理念の考え方



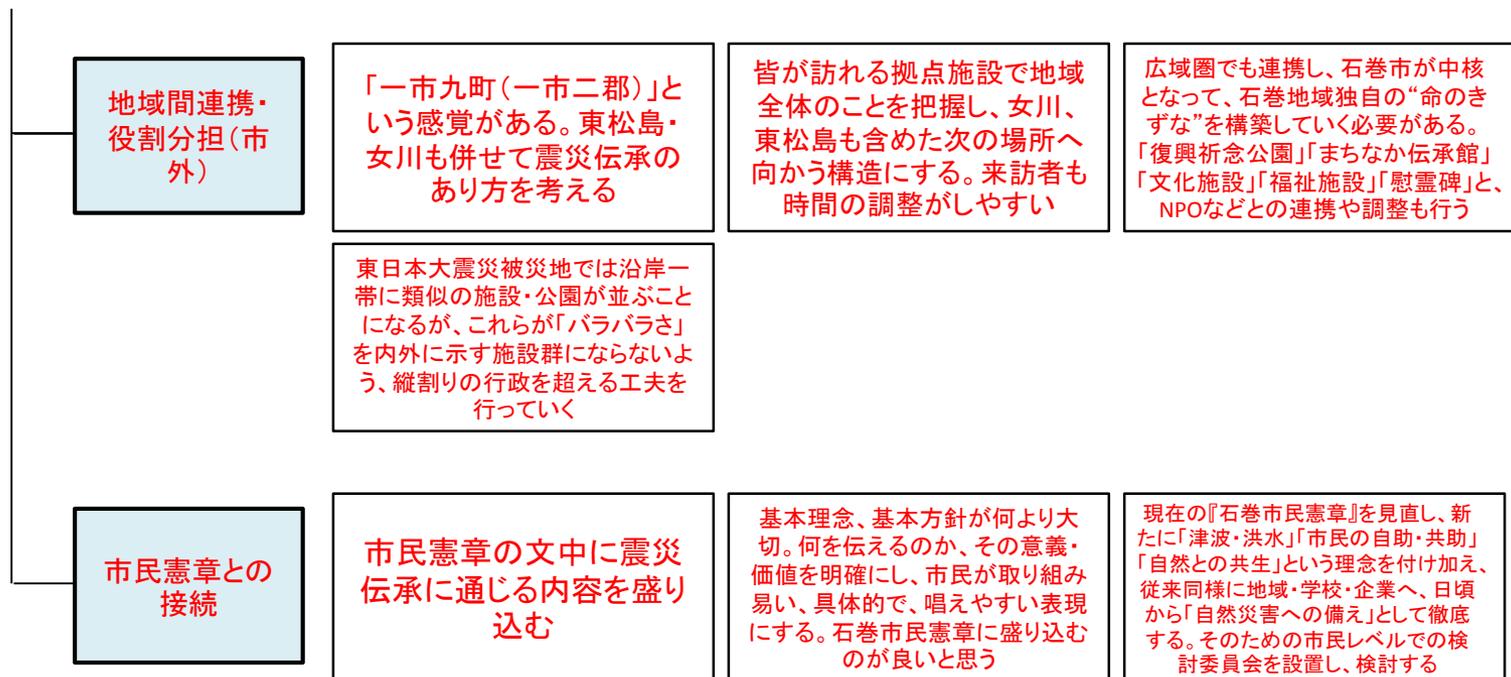
1. 震災伝承の理念の考え方



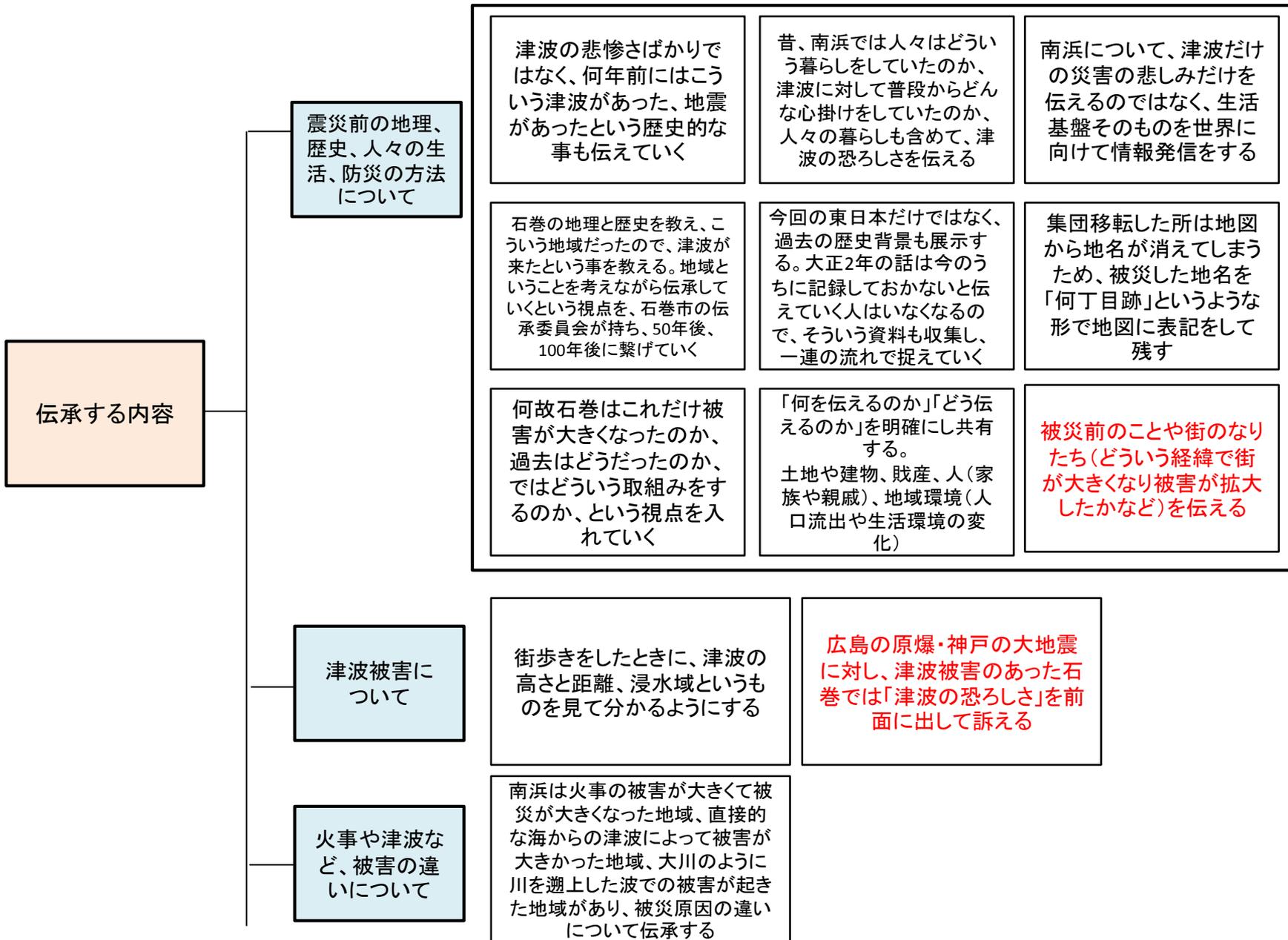
1. 震災伝承の理念の考え方



1. 震災伝承の理念の考え方



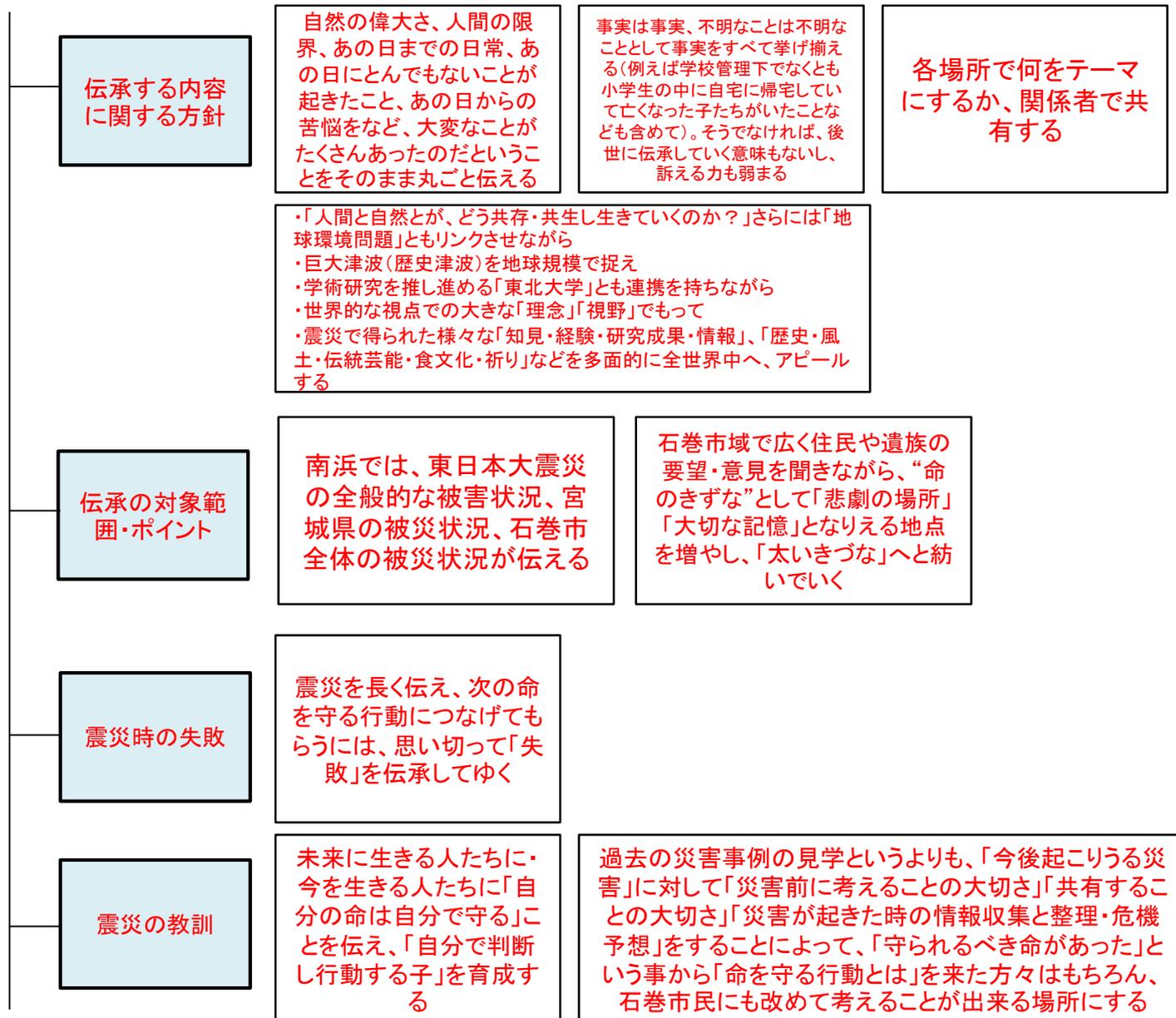
2. 伝承する内容



2. 伝承する内容

大規模な津波火災について	一般的に、津波大火という概念で言われているが、門脇大火である。言葉の使い方自体も、概念が違ってくるので、門脇大火という言葉で、概念として捉える
小規模な津波火災について	門小だけが、大火の震災遺構ではない。焼けた大木、黒くなった石垣が黒くなっている。今回の震災工事で市営住宅を建てているが、その背後にも、家がぶつかって燃えて、擁壁に焼けた痕跡があった。そういう物は本来保存する
災害医療について	今回の災害で石巻市の災害医療が大きく変わったことを残し、伝承する
集団生活再建について	津波の被害にあった方、亡くなった方が今、メインで議論されているが、財産を失い、集団移転している方々も犠牲者であることを含めて伝承をする
NPO、個人活動について	石巻市は最も多くのボランティアやNPOの支援を受けたにも関わらず、外部からのこれまでの支援に対する公式の御礼の機会すら設けられていない。今後、石巻訪問する多くの方々は「支える／支えられる」のどちらの立場でも学びを得てもらいたいため、被害の実情だけでなく、支える側の貢献も伝えられるような計画をする

2. 伝承する内容



2. 伝承する内容

命の大切さについて	「命の大切さ」「大災害が発生したとき命を守るためにどうすれば良いか」を学んでもらう
防災計画、取組みについて	防災教育の重要性を改めて認識し、行政、幼児・小学生・中学生・高校生・大学生・会社などの防災教育を見直す
復興状況について	千年に一度と言われる震災を体験した者として、防災教育の観点から、自分たちがどのように立ち直ったかを後世に伝える
支援に対する感謝	震災支援を全国や全世界中の人々から支援を受けた立場として、その恩返しに被害の現状を後世に残すことだと強く感じました
個別の内容	日和幼稚園児6人が亡くなったという事実・教訓は重い。「幼い命が津波で失われた」という事実・悲しみを行政も積極的に受け止め、多くの人たちが車と共に山際に打ち付けられ、亡くなった津波大火(門脇大火)を伝承する意味でも「メモリアル回廊」に組み込む

3. 伝承の方法

伝承の方法

学校教育の中で伝承・防災教育をする

学校教育の中で防災教育を進めていく

学校教育で、津波が来た事、地震が来た事、何年も前からこんな風に繰り返しながらやってきて、人々がどういった力で這い上がってきたかという石巻の歴史を伝えていく

学校教育のなかでの震災教育の位置づけ、また震災を子どもたちにどう伝えていくかを検討する。例えば「自ら命を守る」「自分で考え判断する子どもを育成する」といった狙いを打ち出し、指導する

計画的・実践的な防災教育を推進する。教育課程の中に位置付ける

教育委員会とタイアップして伝承を考えていく。副読本など教材化についても検討する

そなえ館では義援金の残りの一部を学校の防災教育へ補助している。民間・行政のみならず、学校教育の中に震災伝承を位置付け、子どもたちが伝承の担い手になっていく

防災教育の重要性を改めて認識し、行政、幼児・小学生・中学生・高校生・大学生・会社などの防災教育を見直す

家庭の中で伝承をする

最小のコミュニティーである家族の中で伝承をする。備えや災害時の待ち合わせ場所・待機日数などを決めておく

人から人に伝えるものとして、親から子、子から孫へと家族間での伝承や語り部活動などがあるが、他の伝達方法(例えば口承音楽のような)も作り出していく

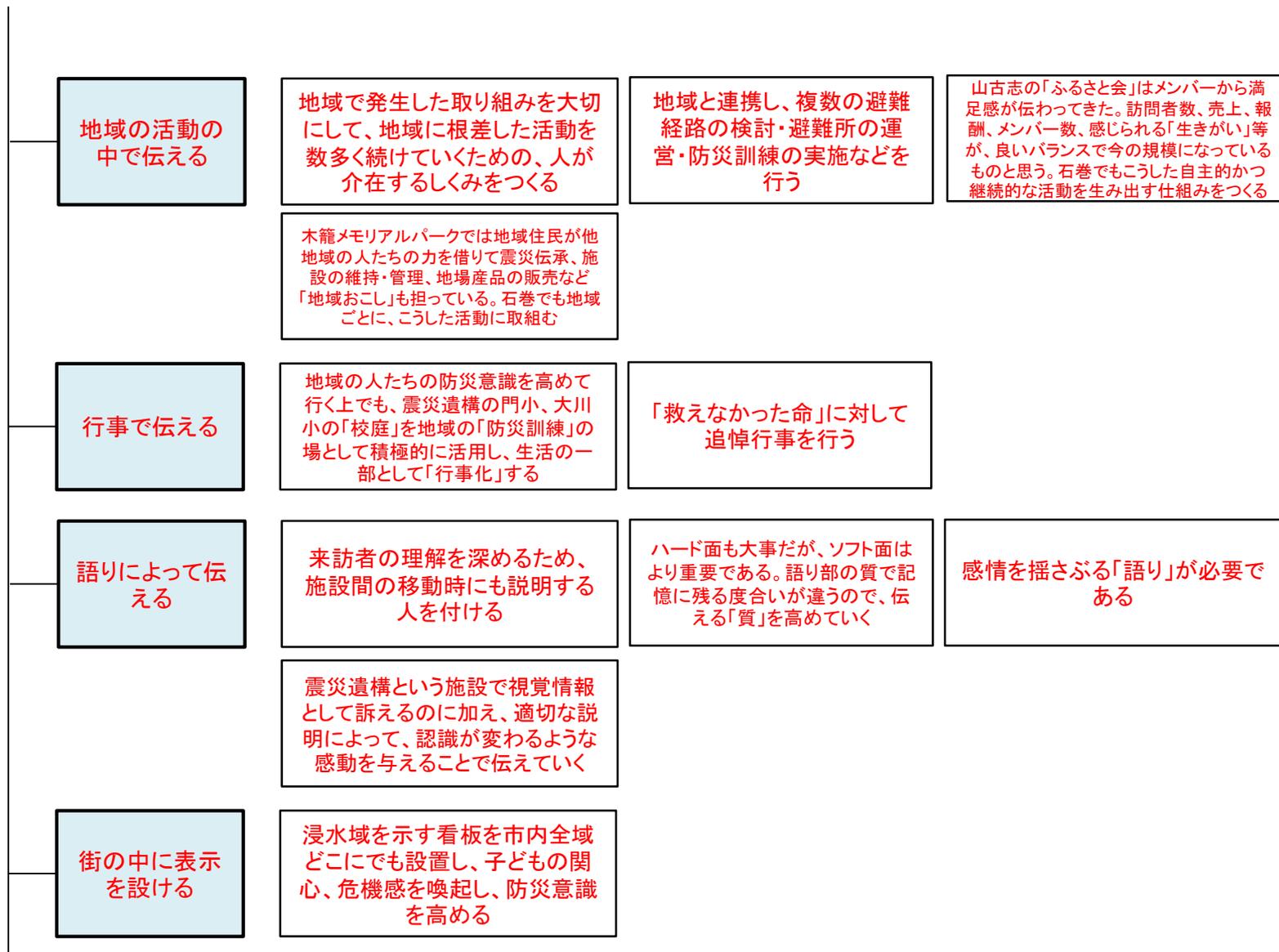
日常生活の中で慣習として伝える

広島、長崎のようにサイレンで震災発生の時刻を知らせる

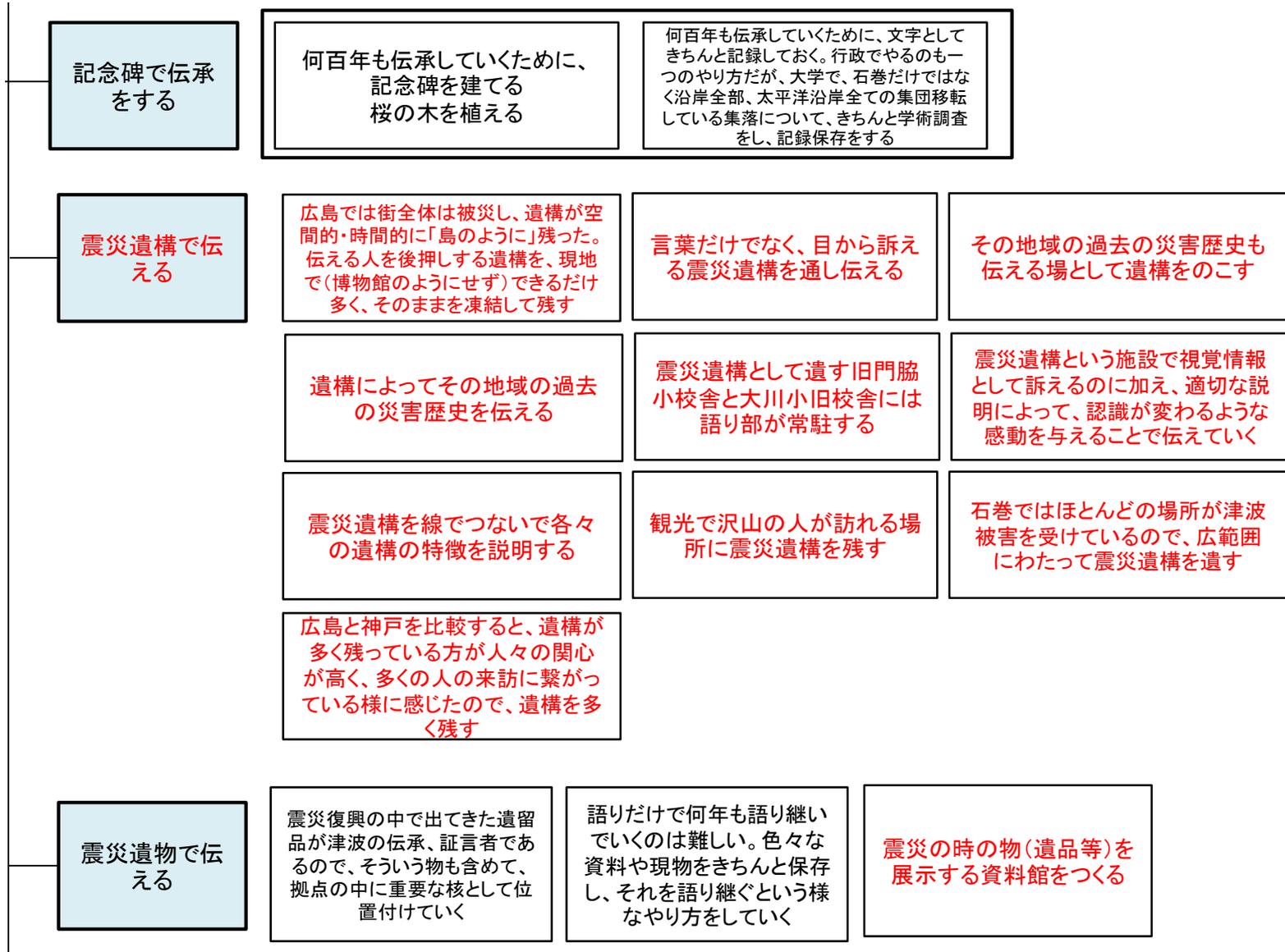
「はだしのゲン」や「ガラスのうさぎ」のような絵本で、地域に育つ子どもに身近で当たり前のものとして震災を伝える

終戦から70年が経つ今、広島では「体験者がいなくては来る意味がないのでは」という声が上がってきているが、体験者がいなくなっても伝わるように、生活の中で慣習として伝えていく

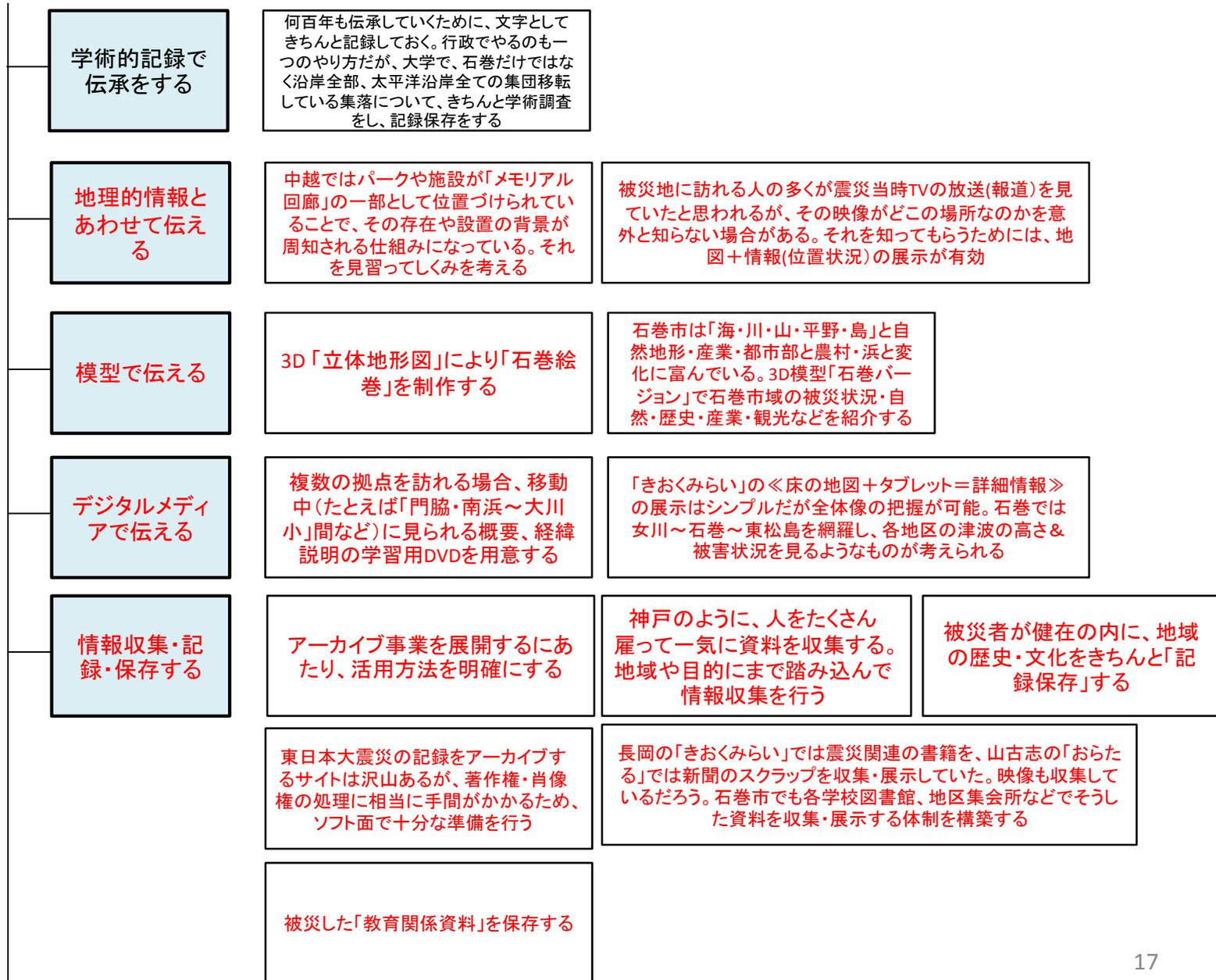
3. 伝承の方法



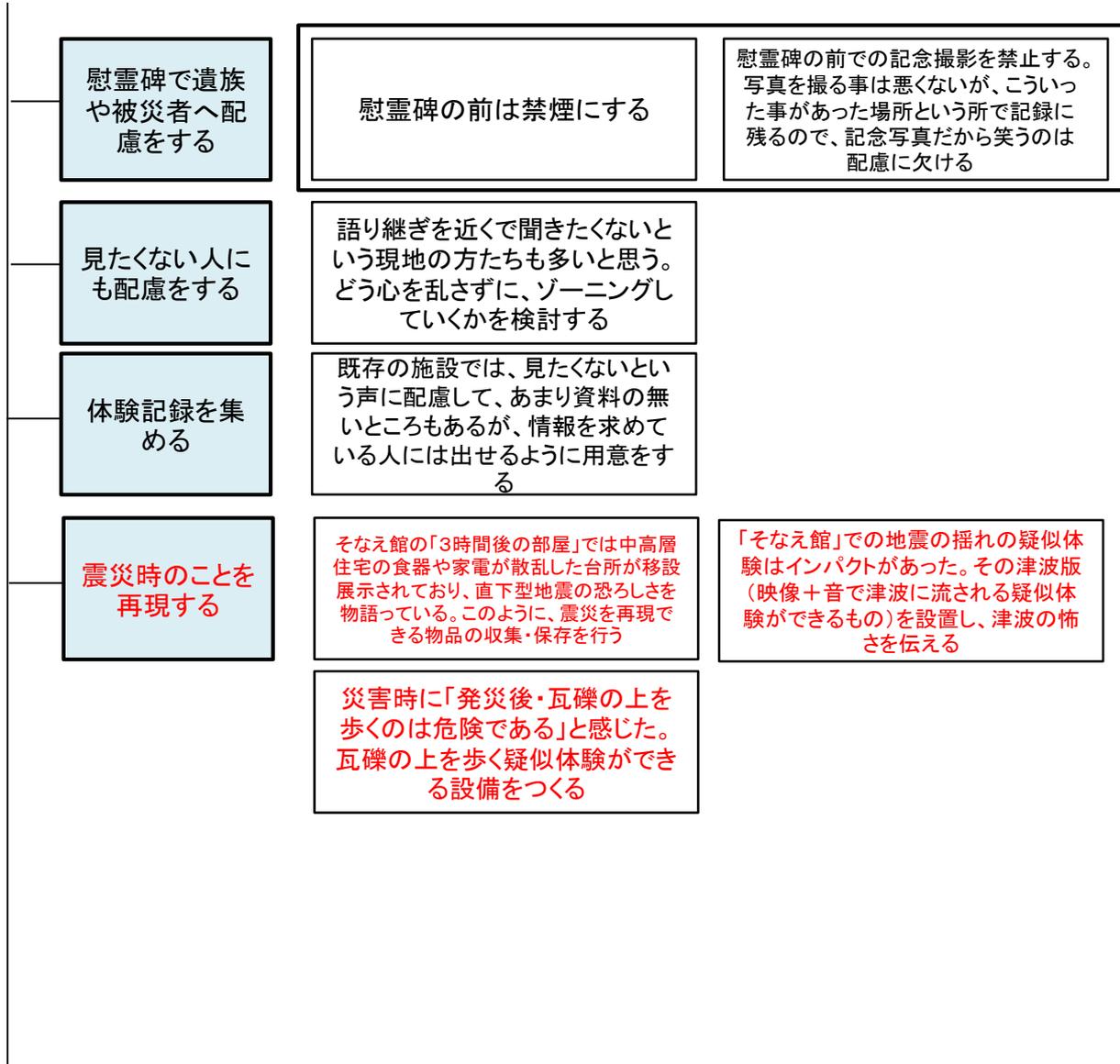
3. 伝承の方法



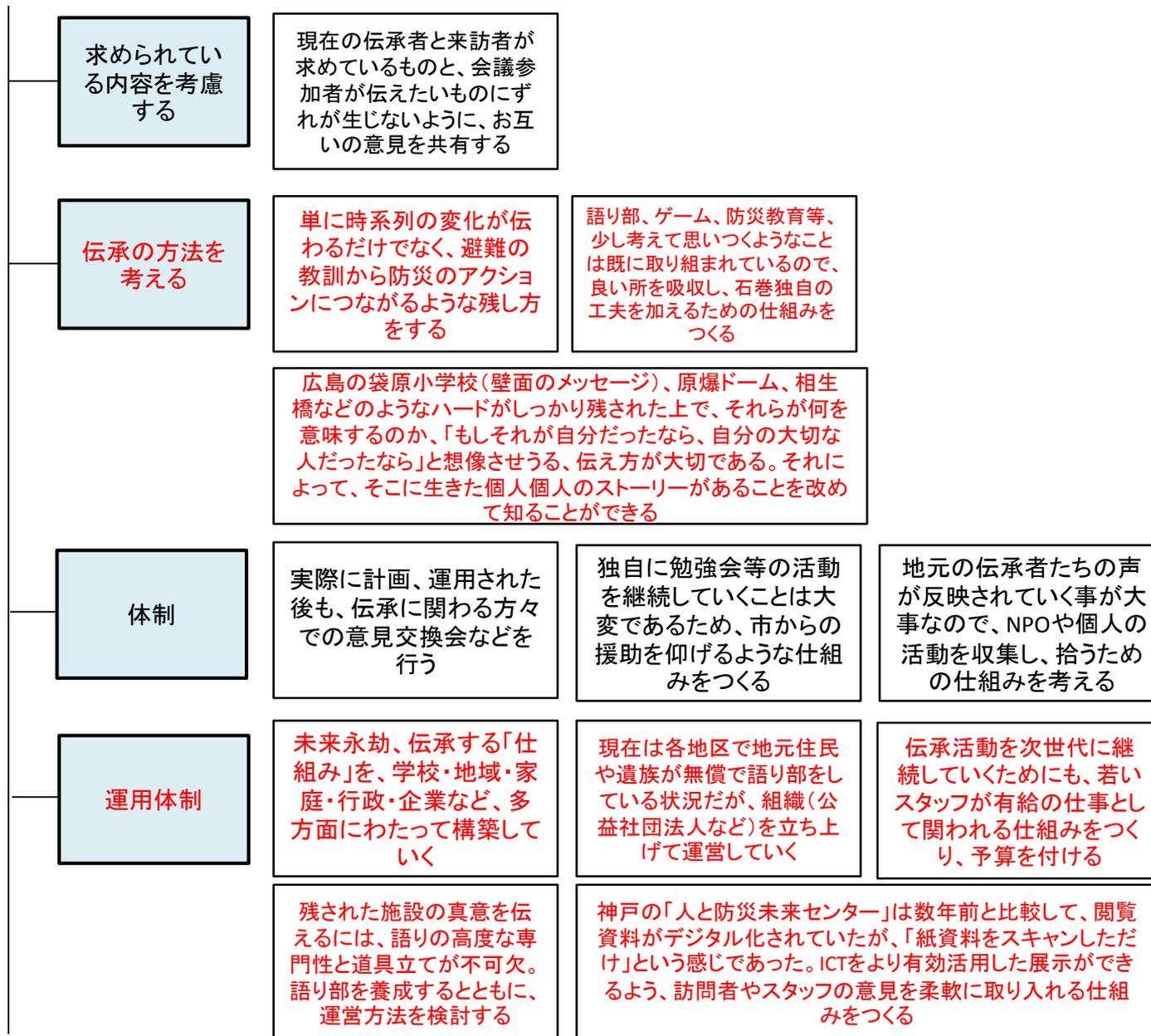
3. 伝承の方法



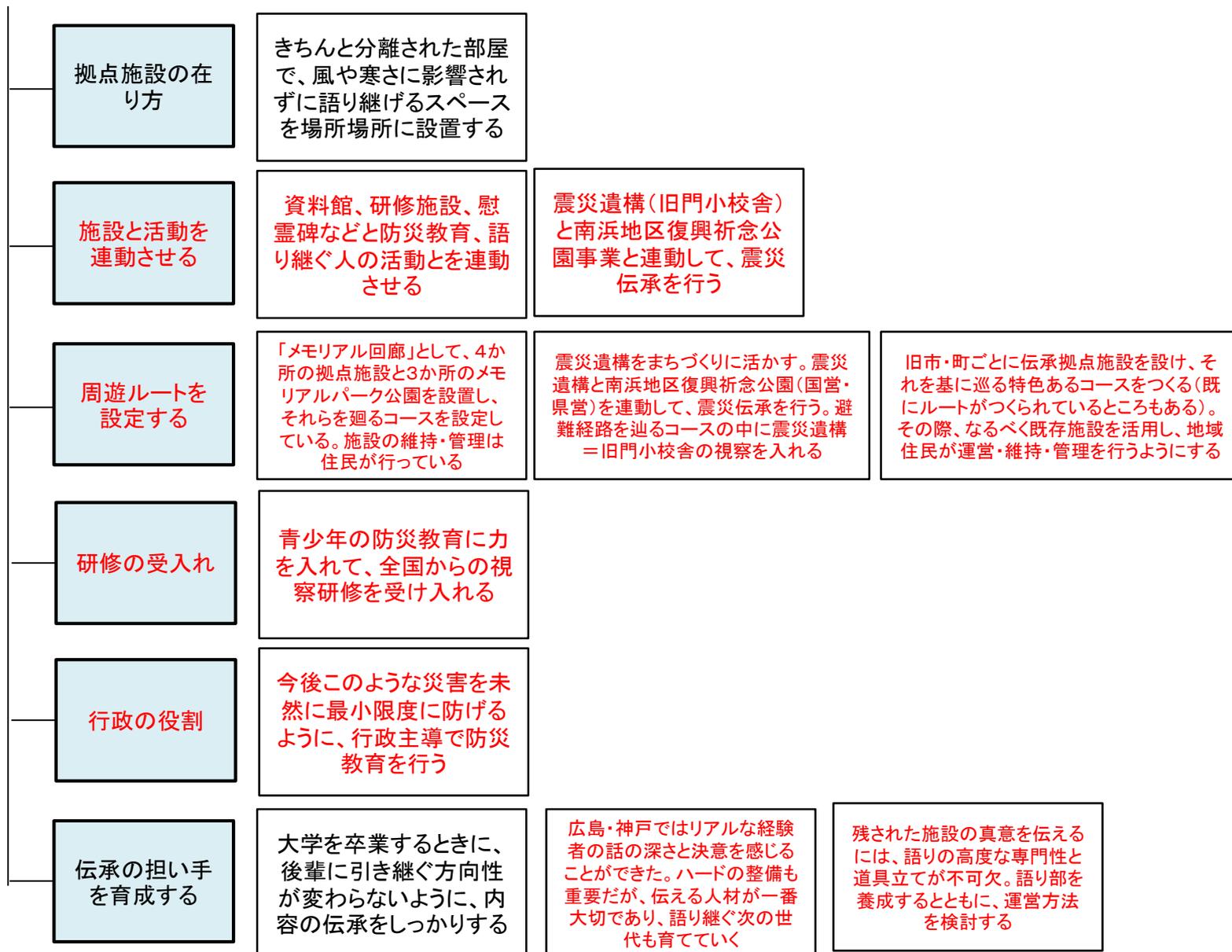
3. 伝承の方法



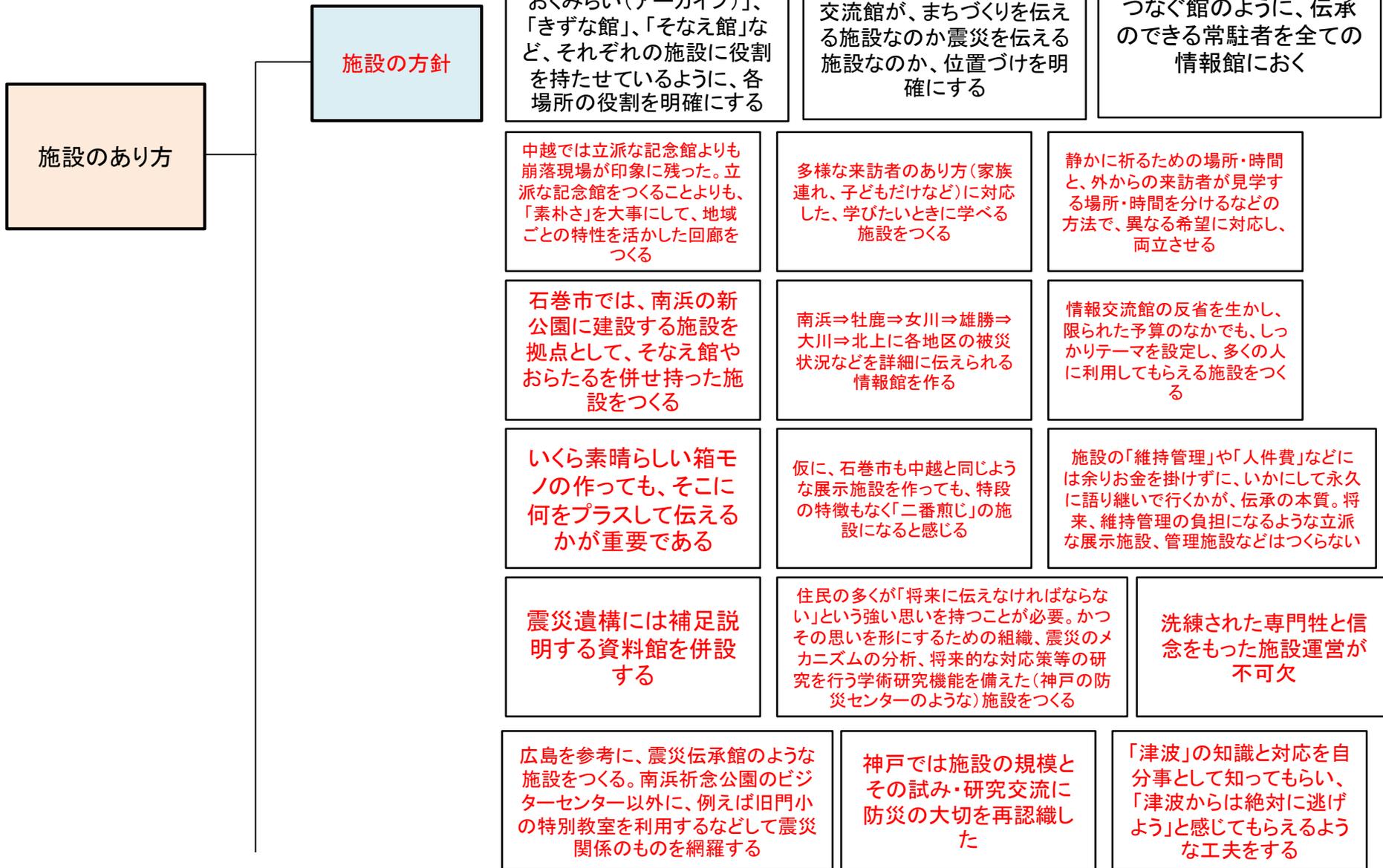
3. 伝承の方法



3. 伝承の方法



4. 施設のあり方



4. 施設のあり方

展示のあり方

中核施設は、地域防災の計画・取組例など来館者が自分の家庭、地域の防災に向け具体的なイメージをもてるような内容にする

ありのままを感情とともに伝える、感情が沸き立つような展示があると良い

30年前に見た広島「黒い爪」が強く印象に残っていた。一つ一つ展示が持つ意味、見る人に何を感じてもらえるかを考えた展示をつくる

中越の「そなえ館」のように、震災発生から時系列で展示を行う

「きおくみらい」での床一面の航空写真から記録映像をipadで検索・閲覧できる取り組みは画期的だが、時間がなければipadをちょっと操作する程度で終わってしまう。それよりも、「おらたる」のような写真拡大と説明展示のほうが老若男女すべてを対象にしており親切である

ガラス床の下に街並み復元模型を置くなど、床の活用方法を考える

山古志の「おらたる」のように、震災当時の状況を写真で大きく展示する

デジタルものと伝承活動の相性が良いのは事実だが、大多数の視察者は、たくさん情報があっても数が所しか見ないだろう。「いかに見せるか」と、「それを、どのように次の命を守る行動につなげるか」を考慮した伝承の方法を考える必要がある

「きおくみらい」のシアター映像は、星、地域的な広がり、人のフォーカス、など、気持ち良く視聴できる仕上がりになっている。業者に丸投げではなく、震災を伝える当事者の間で、石巻ではどんな映像をつくるか検討する

入口に「生きた魚を水槽に放ち、三陸の海を再現」する。その三陸の海が猛威を振ったというストーリーが出来て、石巻は魚の町であることもアピールできる

「人と防災未来センター」の常設展示は資料が多すぎる。経験や教訓を分かりやすく展示する必要がある

「モノ」の展示にあたっては、「数ではなく質(ストーリー)」を重視する

神戸の「人と防災未来センター」は数年前と比較して、閲覧資料がデジタル化されていたが、「紙資料をスキャンしただけ」という感じであった。ICTをより有効活用した展示ができるよう、訪問者やスタッフの意見を柔軟に取り入れる仕組みをつくる

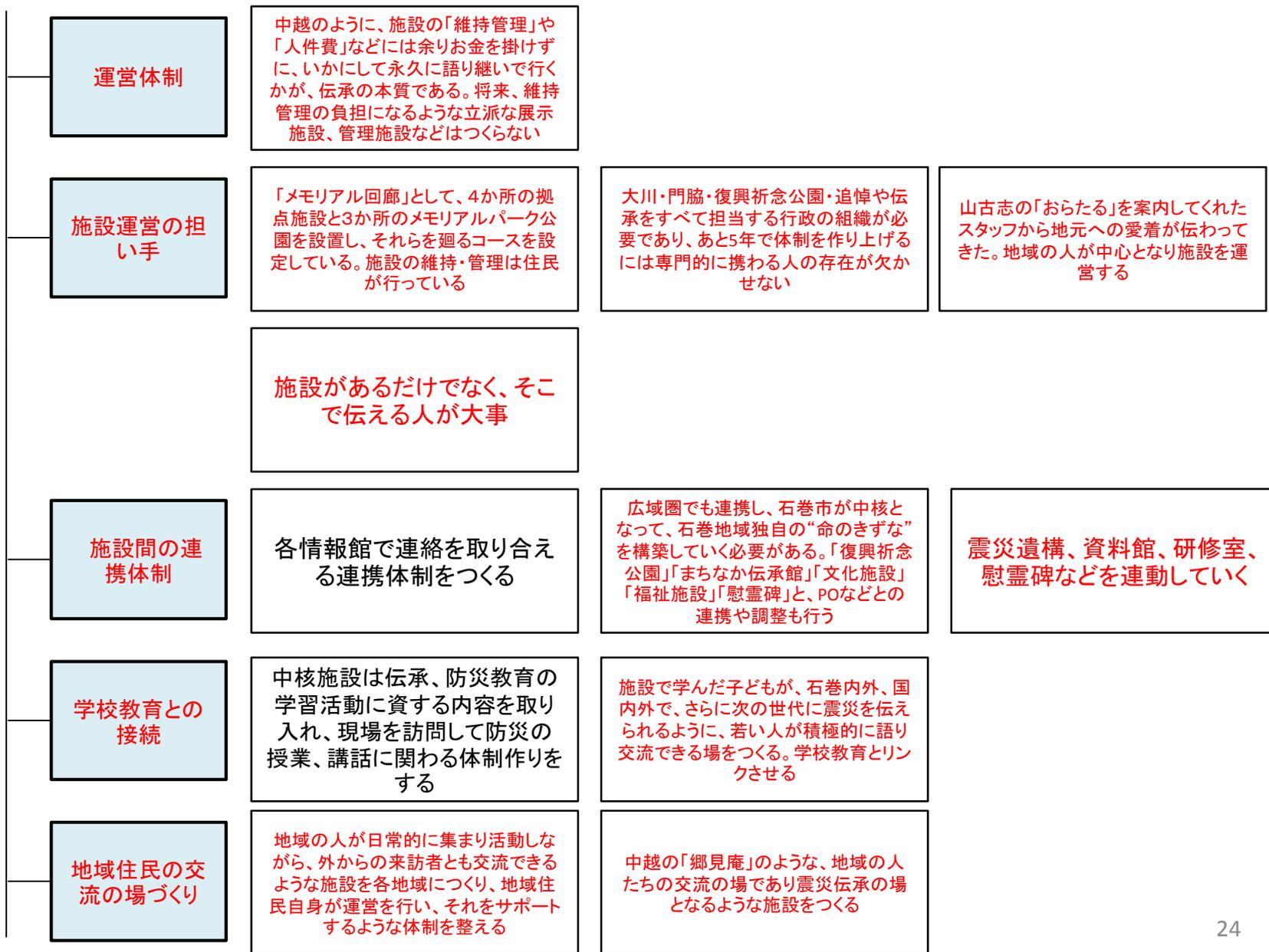
震災時の事を再現する

石巻でも「津波」を何らかの形で可視化したり体験できるモノを置く

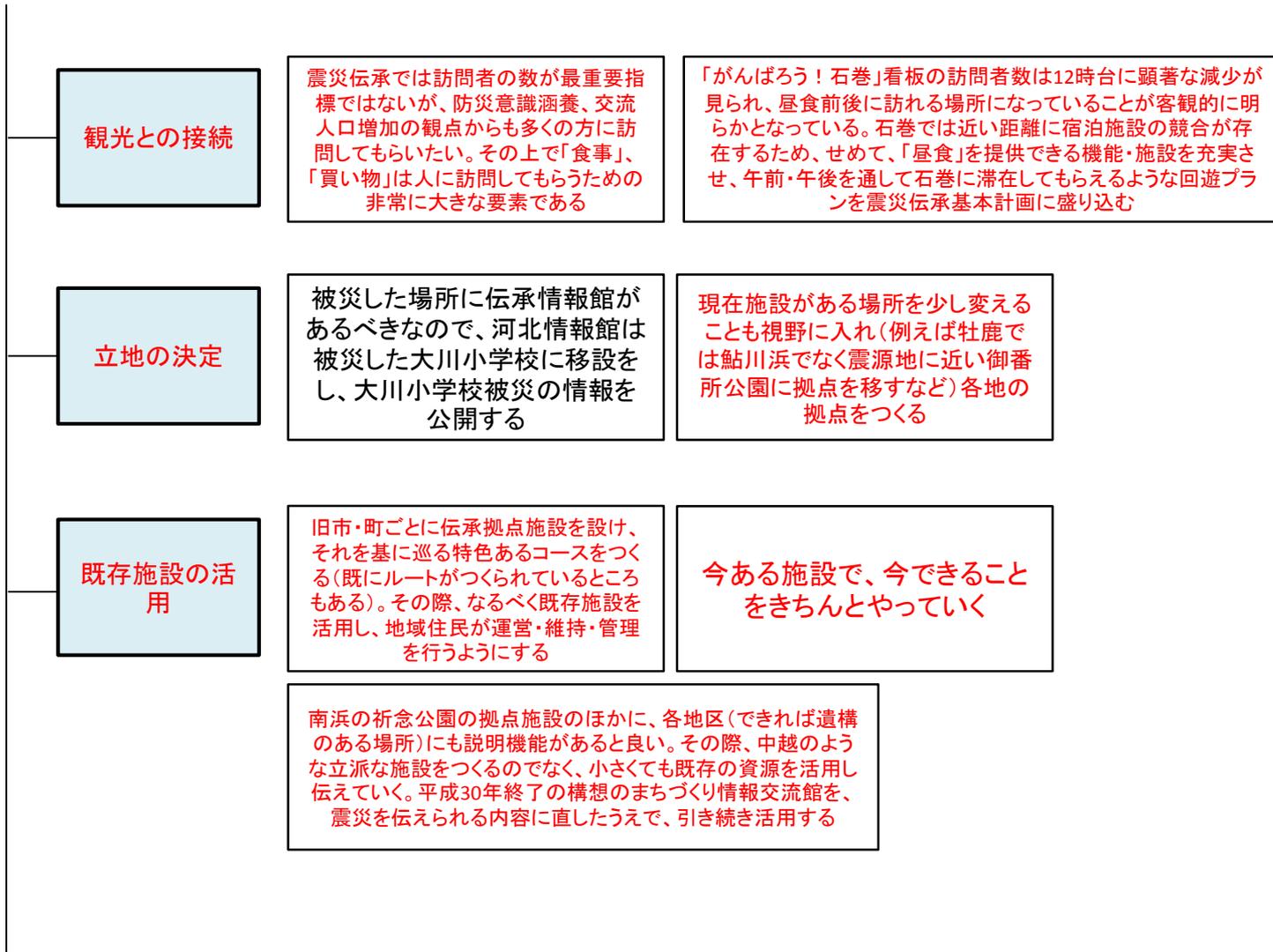
4. 施設のあり方



4. 施設のあり方



4. 施設のあり方



4. 施設のあり方

